

彼方で黒鳥がベイリフへ文を届けてから、寸刻。

『マーデルプラッタ』で一夜を明かしたネック一行は、必要なものを買込んでから、馬車を手配した。

今日は、この街から北へ馬車で半日、『パルバ港』に向かう。

晴天の下、馬車は街道を行く。

『パルバ港』への道程を三分の一ほど辿ったところで、馬車とすれ違った。馬を四頭立てた大きく豪華な箱車で、ネックたちの乗っている、荷台に幌を張っただけのものとは明らかに違っている。

「えらく立派な馬車だなあ。要人様か？」と、ノランが呟く。

「学園のだろうか」

「学園設立五周年、だっけ？　そーいや昨日のは前夜祭なんだよな」

「ああ」

ネックは欠伸をしながら車から顔を出し、離れていく馬車を見遣る。

ネックはにやっと笑って、

「当たりだ」

ネックの推察通り、馬車のドアに学園のエンブレムがあった。

○

その豪華な馬車が『マーデル・プラッタ』に到着したのは、太陽が天頂に至る頃である。

学園のホールには、既に多くの人があった。生徒や教授一同、そしてもちろん分館長の姿もある。

小太りの分館長はそわそわしているようで、しきりに額の汗をハンカチで拭っていた。点在する丸テーブルには飲み物があるが、まだ誰も手をつけていない。各々は、本館の要人たちの来着を待ちつつ、どこか緊張気味に談笑していた。

「ロイン君」

研究室の同輩と話しているロインの背後から、彼の担当教授が声をかけた。

「なんでしょう、教授」

「君、昨日が提出期限だった研究報告の方はどうなってるのかね？」

ロインは目を点にして、

「え？　そちらはこの祝祭を考慮して、明後日まででいいと教授が仰ったのでは……」

「私はそんなことは言っていない。いいかね。今日の夜までは待つが、それ以降は受け取らんぞ」

教授は続けて「まったく、友人と遊んでなどおるから肝心なことを失念するんだ。だいたい君はだね」と、ぶつぶつ言った。

ロインは無言で、眼鏡の奥から鋭い視線を教授に向けていた。その様子を見ながら、萎縮した同輩たちが「あの教授、俺たちが分館の生徒だからって厳しくしてるんだよな……」と囁き合った。

「ゴホンッ！　えー、諸君！」

その時、ホールの中心にいる分館長が大きな声を発した。

賑やかだったホール内が、しんと静かになり、そこにいる全員が分館長に視線を集めた。

「ただいま、ネイクス大陸から『シェンティア学園本館』の皆様がこの分館へお着きになりました。どうぞ、拍手でお迎えください！」

分館長がホールの出入り口に合図を送り、控えていた職員が大扉を開けた。

万雷の拍手が鳴り響く。

がっしりとしたロングコートの男性を先頭に、数人の人物がホール内へと入ってくる。人垣の向こうにその男性を見たロインは、思わず「ああっ……！」と声を漏らす。

「ようこそ、デニス副学園長。お待ちしております」

分館長がロングコートの男に手を差し出し、

「盛大な歓迎に感謝するよ、分館長」

デニスと呼ばれた男性が、にこやかに握手をした。

拍手が一層大きくなる。デニスは周囲を見回しながら手を挙げてそれに応え、やがて拍手が落ち着くのを待ってから、

「本日はシェンティア学園、マーデルプラッタ校の五周年式典にあたり、かくもたくさんの皆様のご来賀を賜り、感謝申し上げます」

デニスのよく通る低い声が、ホールに木霊する。

「戦争の終わり、平和の象徴としてこのフィルストの地に学園の分館が設立されて今日で五年。純血・異血のような血種による差別のない平等さを大切にするこの学園は、勉学や研究の機会を各大陸に広めるために設立された。この記念すべき祝日を迎えられたのは、ひとえに諸君らの勉学と研究の賜物だ」

一同は静かにデニスの言葉に耳を傾ける。

「噂に聞いている者もあるかもしれないが、現在、邪獣が各地で猛威を振るっている。その脅威に立ち向かうには、君たち学生たちの『知力』こそが必要だ。これからも大いに励み、十年、二十年、いや百年と、学園の歴史を紡いでいこうではないか！」

わあっ、という歓声と共に、再び拍手が起こった。

デニスは側近から渡されたグラスを掲げ、

「改めて、諸君らに感謝の意を。さあ、今日は大いに祝い、楽しみたまえ！」

張っていた空気が弛み、先ほどまでとは違う色の喧騒がホールに満ちた。

「あれがデニス副学園長かあ……」

ロインの隣にいた同輩のひとりが呟いた。

「本館の指揮と研究だけでも多忙なのに、このためだけに予定を調整して来てくれたらしい」

「次期、学園長候補なんだってな。風格が違いすぎる」と、もうひとりの同輩も続く。

この道に携わる者なら知らぬ人はいない、ウインクレル・デニス。

これまでに発表した論文は数知れず、そのどれもが画期的な新説に満ちており、謎の多いこの大陸の歴史や魔法という神秘を紐解くための考古学を大いに前進させてきた。

本館の設立と共に二十七歳の若さで副学園長に就任した彼は、学園の管理者であると共に、ひとりの優秀な研究者でもあり、そしてロインが研究者への道を歩むきっかけになった憧れの人でもあった。

この分館にデニスが来るのは初めてだ。

つまり、ロインは初めて本物のデニスを見た。

自分にとっての英雄が、目の前にいる。

声をかけるなら、今しかない。

ロインは、デニスの元へ歩み出そうとした。何か具体的な話があるわけではない。ただ、自分が夢中になれることへの道にいざなってくれた感謝を伝えようと思った。

だが、

「どこへ行くのかね？」

ぐっ、と、ロインは肩を掴まれた。教授だ。

「中断しただけで、話はまだ終わってないぞ」

教授はいささか憤慨していたようだった。

「すみません、教授。離してください」

「こら、逃げるんじゃない」

「離してください。お願いします」

「そうやって君はいつも肝心なところをはぐらかす。それが君の最大の欠点だ」

平静を装いながら、ロインは思う。いつかこの教授に必ず一泡吹かせてやろうと。

「お邪魔しても宜しいかな？」

にこやかな表情のデニスが、手を挙げながらこちらへ近づいてきていた。